

原著論文

領域「言葉」に関連する絵本に対する保育者の意識

山口 恵子¹⁾, 齊藤 勇紀²⁾, 岩崎 保之³⁾

Nursery teachers' awareness for picture books related to "Language" as a curriculum component

Keiko Yamaguchi, Yuki Saito and Yasuyuki Iwasaki

The purpose of this study is to clarify the nursery teachers' awareness for picture books related to "language" as a curriculum component. The authors conducted an interview survey with three nursery teachers and analyzed the data obtained from them using Steps for Coding and Theorization (SCAT).

As a result, it became clear that nursery teachers perceived the practice of picture books in the comprehensiveness of childcare and the continuity of child development. The nursery teachers were aware of the importance of the individuality of children and their assistance to support it, and they were forming an environment in which picture books were used to practice childcare based on their understanding of children. And they were also trying to improve the quality of childcare by reflecting on their own practices.

In addition, the nursery teachers were aware of the growth of individuals and groups when practicing childcare using picture books. It also turned out that the function of the picture books indicated by "language" as a curriculum component described in course of study for kindergarten overlapped with the awareness of the nursery teachers for picture books.

Key words: "Language" as a curriculum component, nursery teachers' awareness, picture books, practice of childcare

1. 問題と目的

保育内容「領域『言葉』」は、幼稚園教育要領¹⁾によると「経験したことや考えたことなど自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とされている。それを踏まえ、保育施設では長年、領域「言葉」において児童文化財が用いられてきた。齊木²⁾は児童文化に関連するテキストや幼稚園教育要領等の法令の文言を調査・分析し、児童文化財の中でも絵本と物語はそれぞれの特性から領域「言葉」と強く関連しており、子どもの言語発達に沿った役割を果たすと述べている。

絵本や物語について、幼稚園教育要領の領域「言葉」においては「ねらい」「内容」「内容の取扱い」のいずれにも言及されている。ねらい(3)には「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」、内容(9)には「絵本や物語などに親しみ、

興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」とある(下線は第1著者による)。また、内容の取扱い(3)「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」および(4)「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」からも、絵本や物語が保育実践において身近なものであることがわかる。

保育内容「言葉」に関する研究全般の動向と特質について調査した南陽³⁾は、CiNii(国立情報学研究所 学術情報ナビゲータ)において「保育」「領域」「言葉」等のキーワードを使って抽出された論文の内容を調査し、分類を行い検討した。その結果、対象となった1991年以降の保育内容「言葉」に関する研究では「絵本・紙芝居」に焦点を当てた研究が最も多いことが明らかになった。領域「言葉」に「絵本や物語など」と記載されている中で、実際には物語よりも絵本の方が児童文化財として一般に

1) 新潟青陵大学福祉心理学部社会福祉学科

2) 新潟青陵大学福祉心理学部社会福祉学科

3) 京都女子大学発達教育学部教育学科

広く認知されていることがわかる。

そのような背景にあって、絵本という児童文化財の活用について、例えば絵本の選択や読み聞かせ等の保育実践については、いくつかの先行研究で調査がなされてきた⁴⁾。しかし、保育者が絵本を通して行う保育実践を総括して、どのように捉えているのかという保育者の意識については研究が進められていない現状がある。

松原⁵⁾は、「保育者の絵本に関する意識調査票」により、保育経験年数と絵本への関心度との関連や、保育者の絵本を通じた園児観等を調査している。また、西坂ら⁶⁾は、保育現場における絵本環境の実態を把握することを目的として保育者の絵本に対する意識を明らかにすることを試み、保育者が絵本を保育に用いることに対してどのように感じているのか、どのような行動をとっているのか等について質問紙を用いた調査を行った。しかし、これらの研究は「園児は絵本が好き」「保育の中で絵本を読む時間帯」等の質問項目に対して質問者が予め設定した選択肢から回答者が選択していく手法をとり、回答内容に質問者の主観が反映される可能性が否定できない。また、松原⁵⁾の研究では質問紙の一部に自由回答記述欄があるものの、その分析が不十分であるという問題があった。

そこで、本研究は保育者へのインタビュー調査を実施し、そこで得られたデータを Steps for Coding and Theorization (SCAT) を用いて分析し、保育者の領域「言葉」に関連する絵本に対する意識について明らかにすることを目的とする。SCATは大谷^{7,8)}によって提唱された質的研究によるデータ分析のための手法である。インタビューの逐語録からテキストをセグメント化(切片化)し、それに基づいたコーディングを行うことで一度脱文脈化を図り、そこからストーリー・ラインを作成することにより再文脈化することが特徴となっており、それらの過程を通してテキストに記述された出来事の深層の意味を表出させることが可能となる。したがって、本研究では SCAT を用いて保育者が主体的・能動的に自らの保育実践を語ることの中から絵本に対する意識を分析し、その深層の意味を明らかにしていく。

II. 方法

1. 研究対象者

保育施設に勤務する保育者3名を対象とした。保育者としての経験年数は、非正規職員としての経験年数を含め、それぞれ保育者Aは16年、保育者Bは9年、保育者Cは9年である。対象者同士は、インタビューにおいて意見を表明しやすい関係が構築されている。保育者Aと保育者Bは同じ保育施設に勤める同僚である。保

育者Bと保育者Cは異なる保育施設に勤めながらも親しい関係にあり、適宜保育についての意見を交換できる間柄である。

2. 研究の流れ

1) 保育と領域に関する講義の実施

対象者に対して、第2著者が保育実践と5領域について、20分間の講義を行った。講義の概要は、A. 保育内容の基本構造、B. 保育における遊び、C. 5領域と領域「言葉」の関連性であった。

2) 調査方法

2021年7月に、上記3名の対象者に対して、第1著者が所属する大学の講義室で調査を実施した。第1著者が司会者となり、「日々の保育において領域『言葉』をどのように意識して実践しているか」を主題としたフォーカス・グループ・インタビュー(以下、FGI)を実施した。FGIのおおよその実施時間は90分であった。

3) データの分析方法

FGIにおける保育者の語りはすべてICレコーダーに録音し、終了後、逐語録を作成した。逐語録の中から、絵本や物語について語られた箇所を抽出し、その逐語録箇所を分析の対象とした。

逐語録は Steps for Coding and Theorization (SCAT) を用いて分析を行った。初めにコーディングのための4つのステップにしたがって分析を進めた。テキストをセグメント化し、それぞれのセグメントについて、A. データの中の注目すべき語句、B. それを言い換えるためのデータ外の語句、C. Bにおいて記入した語句を説明することのできる概念や語句、文字列、D. これまでのA~Cの作業から浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していった。そして、Dで記述したテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインを作成した。

その後、SCATから抽出された構成概念について、第1著者と子ども学を専門とする大学教員の2名の双方が合議しながら、サブカテゴリー、カテゴリーとして分類・命名し、保育者の意識の特徴を抽出した。作成されたカテゴリーと構成概念については、第3著者が内容を確認し、合意を得た上で作表を行った。

4) 倫理的配慮

研究対象者には、研究の目的や方法、個人情報の保護、研究協力への自由意志と協力撤回の自由について口頭で説明し、さらに文章でも説明した上で、本研究への同意を得た。

III. 結果

保育者3名のインタビューをSCATにより分析し得ら

れたテーマ・構成概念について、領域「言葉」に関連する絵本に対する保育者の意識のストーリー・ラインを示した。なお、下線部はテーマ・構成概念を示した。

1. ストーリー・ライン

〈保育者 A〉

絵本は子どもが好む教材である。保育施設においては、絵本に対して子どもの主体性を促す環境構成を意識しており、子どもの希望を尊重した読み聞かせを実践している。絵本の言葉を介した保育者と子どもの交流がある。

絵本は言葉を伝達する教材であると共に、子どもの認知の発達に関係している。保育者と子どもの関係性の中で楽しむ。

子どもの発達段階に沿った絵本を、子どもの皮膚感覚でいつでも手に取ることができる。また、数多くの絵本がある中で、大人の判断による選択もある。

絵本は新生児から体験できる教材である。子どもの興味関心に関する絵本を見られるような意図的な環境構成をしている。2歳児と絵本に関する実践では、1対1の読み聞かせをしており、好きな時間に読んでいる。自らの保育を省察しながら、子どもの発達に沿った絵本の選択をしたいと考えている。自らの保育観は、発達の個人差を意識し、子どもの発達に沿った保育実践をするということである。

子どもはイメージの世界を楽しみ、絵本の世界と現実の世界を往来する。テレビ番組のキャラクター等の商業主義を排除するという園の価値観に即して、絵本を保育に取り入れている。

〈保育者 B〉

発達に沿った絵本の読み聞かせの環境設定がある。絵本を一緒に読む中に、空間における保育者と子どもの交流や、保育者と子どもが共有する楽しみを見出している。

発達に応じた読み方、タイミング・場所、保育内容に合わせた絵本の選択を意識して実践している。1つの絵本を集団で分かち合う世界がある。

開始のタイミングについて、内省している。絵本の読み聞かせが生活行為の補助となっていることや、習慣化への疑問がある。

絵本によって、クラスの中でテーマの共有と遊びの拡大が見られる。一方で、個々の興味関心の差はある。発達に沿った絵本のあり方を考え、保育実践を内省し、取り組みの変化があった。

絵本について、保育実践の中での意味づけは、自身の保育の力量に対する自己認識と関連している。絵本の存在意義として、集団(クラス)の活性化、集団で共有するテーマ・喜びが挙げられる。絵本は遊びの機会を提供

し、子どもの想像力の発達に関わっている。絵本は、集団に共通するテーマを提示する。絵本を用いた保育実践は、遊びとイメージの拡大に繋がる。

自身の絵本観として、保育に欠かせない教材であると考えている。それは、商業主義への価値観とも関係している。放送メディアとの別離という園内の方針の一致により、絵本でイメージの世界を構築していく。

〈保育者 C〉

園では、子どもが絵本を手取る行為において、子どもの主体性を引き出す環境設定がされている。子どもの興味関心に沿った絵本を揃えるという環境設定もされている。保育者による環境構成では、子どもの興味関心に沿った絵本を選び、子どもの発達に即した絵本との出会いを援助する。

絵本の読み聞かせは保育者による行為であるものの、子ども主体による絵本の選択がなされ、心の交流の時間となっている。これらは、各園共通の認識であると考えている。

領域「言葉」に関する意識として一番あるのは、絵本や紙芝居の読み聞かせである。

絵本の読み聞かせのタイミングとしては、降園前の読み聞かせが定番となっているが、実際は多様な保育実践があり、流動的な時間設定となっている。読み聞かせには、保育者による事前準備がある。

2. 記録の構成概念の分析

領域「言葉」に関連する絵本に対する保育者の意識は、「背景にある価値観」、「子どもを尊重した保育実践」、「個と集団の育ち」の3つのカテゴリーに分類された。それが12のサブカテゴリーに分類された。

「背景にある価値観」のカテゴリーは、「園の価値観」「絵本観」「保育の振り返り」の3つのサブカテゴリーから構成されている。

「子どもを尊重した保育実践」は、「子ども主体」「発達の個人差」「絵本の選択」「環境構成」「タイミング・場所」の5つのサブカテゴリーから構成されている。

「個と集団の育ち」は、「保育者と子どもの関係づくり」「集団への作用」「子どもへの作用」「子どもの体験」の4つのカテゴリーから構成されている。

表1に、SCATで抽出した構成概念と、それを集約したカテゴリー、サブカテゴリーを示した。

IV. 考察

本研究は、保育者へのインタビューとその分析を通して、保育者が領域「言葉」に関連する絵本に対してどのような意識を持っているのかを明らかにすることが目的

表1 領域「言葉」に関連する絵本に対する保育者の意識のカテゴリー化

カテゴリー	サブカテゴリー	構成概念
I. 背景にある価値観	1. 園の価値観	園の価値観, 園内の方針の一致, 保育観, 商業主義への価値観, 商業主義, 放送メディアとの別離
	2. 絵本観	各園共通の認識, 領域「言葉」に関する意識, 絵本の存在意義, 絵本観, 絵本を用いた保育実践, 多様な保育実践, 楽しみ, 数多くの絵本, 子どもが好む教材, 保育に欠かせない教材, 生活行為の補助
	3. 保育の振り返り	保育の省察, 内省, 保育実践の内省, 保育実践の中での意味づけ, 習慣化への疑問, 取り組みの変化, 力量に対する自己認識
II. 子どもを尊重した保育実践	1. 子ども主体	子どもの興味関心に沿った絵本, 子どもの興味関心, 個々の興味関心, 希望を尊重した読み聞かせ
	2. 発達の個人差	子どもの発達に沿った保育, 発達の個人差, 発達段階に沿った絵本, 発達に沿った絵本のあり方, 発達に沿った絵本, 発達に応じた読み方, 発達に即した絵本との出会いの援助
	3. 絵本の選択	保育内容に合わせた絵本の選択, 子どもの発達に沿った絵本の選択, 子ども主体による絵本の選択, 大人の判断による選択
	4. 環境構成	主体性を引き出す環境設定, 主体性を促す環境構成, 意図的な環境構成, 保育者による環境構成, 保育者による行為, 環境設定, 保育者による事前準備
	5. タイミング・場所	タイミング, タイミング・場所, 開始のタイミング, 降園前の読み聞かせ, 流動的な時間設定, 好きな時間
III. 個と集団の育ち	1. 保育者と子どもの関係づくり	保育者と子どもの関係性, 1対1の読み聞かせ, 保育者と子どもが共有する楽しみ, 心の交流の時間, 空間における保育者と子どもの交流, 言葉を介した保育者と子どもの交流
	2. 集団への作用	集団(クラス)の活性化, 集団で分かち合う世界, 遊びの機会, テーマの共有と遊びの拡大, 集団に共通するテーマの提示, 集団で共有するテーマ・喜び
	3. 子どもへの作用	子どもの想像力, イメージの世界, イメージの世界の構築, 絵本の世界と現実世界との往来, 認知の発達, 言葉を伝達する教材, 遊びとイメージの拡大
	4. 子どもの体験	新生児から体験できる教材, 2歳児と絵本, 皮膚感覚, 手に取る行為

であった。結果から、保育者の絵本に対する意識について考察した。

保育者の絵本に対する意識は、「背景にある価値観」、「子どもを尊重した保育実践」、「個と集団の育ち」という3つのカテゴリーから構成されていた。

1. 「背景にある価値観」について

「背景にある価値観」は、「園の価値観」「絵本観」「保育の振り返り」という3つのサブカテゴリーから構成されていた。保育者の絵本を用いた保育実践の背後には、勤務する保育施設の保育に対する考え方や保育者自身の絵本に対する認識、保育者が日々の保育を内省し実践の改善に取り組もうとする意識があることが明らかになった。保育者は保育実践において絵本は不可欠な教材であ

ると認識しており、絵本を用いた多様な保育を実践している。放送メディアと一定の距離を置くといった保育施設の方針も、それを後押しする。しかし、保育者はただ日々の保育実践に取り組むのではなく、その保育実践を内省することで、絵本を用いた保育の質の向上を図っていると考えられる。

幼稚園教育要領第1章第4「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」の4「幼児理解に基づいた評価の実施」には、「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること」とある。絵本の活用にも、保育を振り返る行為が意識されていることがわかる。

保育者が1歳児クラスでの絵本の読み聞かせをどのよ

うに構成しようとしているのか、その意識をFGI調査によって明らかにした内藤⁹⁾は、保育者が語りの中で自身の実践を振り返り、「日々自分のなかで評価と反省をする」という発言があったことに言及している。本研究の結果からも、絵本を用いた保育実践において、保育者には自らの保育について振り返りと省察があり、それを通して保育実践の向上を目指す意識があることが明らかになった。

2. 「子どもを尊重した保育実践」について

「子どもを尊重した保育実践」は、「子ども主体」「発達の個人差」「絵本の選択」「環境構成」「タイミング・場所」という5つのサブカテゴリから構成されていた。絵本を用いた保育実践において、保育者は子どもを尊重し、子どもが主体であることを意識していることが明らかになった。この意識のもとに、子どもの興味関心や発達に沿った子ども主体による絵本の選択が行われ、また一方で、保育者により絵本に対する子どもの主体性を引き出す意図的な環境構成が行われている。いつ絵本の読み聞かせをするか、どこで読むかといった環境にも、保育者の意識が反映されている。

絵本の選択については、先に述べた内藤⁹⁾の研究において「絵本の選定」についての考察がある。内藤⁹⁾の研究は1歳児クラスを対象としていること等、本研究とは異なる条件下にあるが、保育者が絵本を選定する際の意識として、子どもから直接リクエストされた本を読むこと、保育者が子どもの遊びを観察して絵本のテーマとして取り上げること、保育者が意図的にあるテーマを取り上げることの3つが示されていた。本研究でも同様に、絵本を選択する際の意識として、子どもの主体性を大切にすることと同時に、保育者によって意図的に環境を構成しようとする意識があると考えられる。

子どもを尊重する保育実践は、子ども理解に基づいて行われる。そのために必要なことは、子どもの特性を知ることである。前田¹⁰⁾は、子どもの特性について乳幼児期の「生活(環境)」と「発育・発達」の2つの視点から捉えていくことを提案する。そして、乳幼児にとってふさわしい生活(環境)を保障し続けていく姿勢、子どもの発達の特性や発達の過程に沿った適切な援助をし続けていく姿勢が、子ども理解を踏まえた保育につながることを述べている。これらの姿勢は、本研究の結果から保育者の意識にあることは明らかであり、それが絵本を用いた実践にもつながっていると考えられる。

また、幼稚園教育要領第1章第1においては、「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなけれ

ばならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない」と明記されている。保育は環境を通して行うものであり、子どもが主体的に働きかけることのできる環境づくりや、子どもに必要な経験ができるような環境を子どもの姿を見ながら構築していくことが保育者に求められている。そして、実際に保育施設で働く保育者がそれらを意識しながら絵本を用いていることが、本研究から明らかになった。

3. 「個と集団の育ち」について

「個と集団の育ち」は、「保育者と子どもの関係づくり」「集団への作用」「子どもへの作用」「子どもの体験」という4つのカテゴリから構成されていた。

保育者は、子ども一人一人と集団(クラス)の育ちを意識して絵本を活用していることが明らかになった。個の育ちという意識の背景には、絵本を介した保育者と子どもとの関係づくりや子どもとの交流があると考えられ、保育者は絵本を用いた保育実践を通して生まれる空間や時間の質を重視していることがわかる。また、保育者は絵本について、子どもの想像力や認知および言葉に作用し、発達させると考えている。それにより、子どもの中では絵本の世界と現実世界との往来が行われ、子どもの遊びとイメージの拡大に影響を及ぼすという意識を持っていることが明らかになった。

福島¹¹⁾は2017年に幼稚園教育要領が改定されたことに際し、領域「言葉」の変更点に焦点を当て、幼稚園教育要領の改訂後に期待される絵本・物語の機能は「コミュニケーションの手段としての機能」「想像力を養う機能」「言葉の楽しさを伝える機能」だと述べている。本研究で明らかになった保育者の絵本に対する意識は、幼稚園教育要領で期待される絵本の効果と重なっていると考えられる。

その他、個の育ちという意識の中で保育者には「子どもの体験」が意識され、子どもが絵本を手取る行為や子どもの皮膚感覚について意識し保育実践がなされている点は興味深い。このことから、保育者は絵本に対して、子どものイメージや言葉といった認知・視覚・聴覚への働きかけだけではなく、触覚への働きかけも意識していると考えられる。

一方、集団の育ちに対する保育者の意識には、絵本を用いた保育実践が集団で共有するテーマや遊びの機会を提供し、それを通して集団が活性化され、遊びが拡大していくというものがある。これについて、本稿の最初に

記した幼稚園教育要領の領域「言葉」、内容の取扱い(3)および(4)と保育者の絵本の実践に際しての意識が重なっていることがわかる。

「個と集団の育ち」という意識については、先に述べた2つ目のカテゴリーとも関連し、子ども理解に基づく総合的な指導に対する意識として捉えることが可能である。先述した前田¹⁰⁾は、保育の基本は一人一人の「個」を大切にすることであると言えるが、保育者は一人一人が集まった子ども集団を保育しているため、常に「個と集団」という2つの視点を持ち合わせる必要があると述べている。そして、集団の中で個々の子どもの成長が集団の質を高める力として作用し、集団の質の高まりに刺激されて個々の子どもが成長すると指摘する。本研究においては、保育者が「個と集団の育ち」を意識して絵本を用いた保育を実践していることが明らかになった。保育者は、読み聞かせなどの保育実践を単体として意識しているのではなく、保育の総合性や子どもの発達連続性の中で捉え実践しているのである。

V. 結論

領域「言葉」における保育者の絵本に対する意識調査より、保育者は絵本および絵本の実践を保育の総合性および子どもの発達の連続性の中で捉えていることが明らかになった。保育者は絵本を用いた多様な保育実践を行っているが、その土台には子どもの主体性とそれを支える保育者の援助という意識があり、子ども理解に基づいて環境を構成している。そして、自らの実践の振り返りを通して、保育の質の向上を図っている。

保育者は絵本を用いた保育実践において、個と集団の育ちを意識している。個の育ちに対しては、保育者と子どもとの関係づくりや子どもとの交流といった、実践から生まれる空間や時間の質を重視する。また、絵本を通じた子どもの想像力や認知および言葉の発達を意識する他に、絵本を手取るにより子どもが皮膚感覚で絵本を捉える体験についても意識している。

一方で集団の育ちに対しては、絵本を用いた保育実践により集団でテーマや遊びを共有し、それが集団の活性化につながり、遊びが拡大していくことを意識している。

幼稚園教育要領に記載された領域「言葉」のねらい等が示す絵本の機能と、保育者の絵本に対する意識が重なることも明らかになった。

最後に、本研究の限界について述べる。本研究では、領域「言葉」に関連する絵本に対する保育者の意識について明らかにするための分析手法としてSCATを用いたが、SCAT以外の質的研究手法を用いた分析を加えるこ

とで、より多角的に考察することが可能になると考えられる。また、本研究では9年以上の経験年数がある保育者を調査の対象としたが、保育経験の浅い保育者を対象とした場合、本研究の結果とは異なる意識が導き出される可能性がある。調査対象とする保育者の属性等にも配慮しながら、今後も調査を重ねていく必要があるだろう。

謝辞

本研究の主旨にご理解とご協力をいただいた保育者の皆様に、心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，初版，フレーベル館，東京，2018年。
- 2) 齊木恭子：児童文化財の活用を考える―「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」における領域「言葉」に視点を置いて―，鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要，2018年，76，pp31-40。
- 3) 南陽慶子：保育内容「言葉」に関する研究の動向と特質，こども教育宝仙大学紀要，2017年，9-1，pp13-23。
- 4) 會澤のはら・片山美香・高橋敏之：幼児を対象とした集団における絵本の読み聞かせに関する研究動向，岡山大学教師教育開発センター紀要，2019年，9，pp215-228。
- 5) 松原醇子：子どもの絵本環境に関する一考察(2)―保育者の絵本に関する意識調査より―，日本保育学会大会研究論文集，1984年，37，pp568-569。
- 6) 西坂小百合・篠沢薫・権藤桂子：幼稚園・保育所において絵本はどのように扱われているか―保育者への活動実態・意識調査から―，絵本学，2014年，16，pp37-44。
- 7) 大谷尚：4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案―着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き―，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)，2008年，54-2，pp27-44。
- 8) 大谷尚：SCAT：Steps for Coding and Theorization―明示的手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法，感性工学，2011年，10-3，pp155-160。
- 9) 内藤綾子：保育者の「絵本の読み聞かせ」意識―1歳児クラス担任に対するフォーカス・グループ・インタビューから―，鳥取短期大学研究紀要，2010年，62，pp33-41。

- 10) 前田有秀：子ども理解と保育 in 保育内容総論—生活・遊び・活動を通して育ちあう保育を創る—(太田光洋編)，第1版，同文書院，東京，2019年，pp72-82.
- 11) 福島豪：新幼稚園教育要領領域「言葉」における「ねらい」の変更点についての考察—言葉に対する感覚の豊かさを育むためのイメージモデルの提示—，鹿児島国際大学福祉社会学部論集，2020年，39-1・2，pp23-32.